

2013 年度 基礎理論研究会成果報告書

開発における協同組合  
—途上国農村研究のための予備的考察—

重富真一編

2014 年 3 月

独立行政法人 日本貿易振興機構

アジア経済研究所

## 目次

はじめに	iii
序章 開発と協同組合—先行研究の検討—	1
重富真一	
第 I 部 大陸別概観	
第1章 アジアの協同組合の生成と展開パターン	22
岡本郁子	
第2章 アフリカ農村の協同組合とその研究視角	41
重富真一	
第3章 ラテンアメリカの協同組合	55
清水達也	
第 II 部 国別レポート	
第4章 中国における協同組合の生成と再生についてのノート	72
重富真一	
第5章 タイにおける協同組合生成についてのノート	84
重富真一	
第6章 農業政策の変化と協同組合の役割：エチオピア・タンザニアの事例	100
児玉由佳	

## 執筆者紹介（執筆順）

しげとみ しんいち  
重富 真一 : アジア経済研究所 地域研究センター 次長

おかもと いくこ  
岡本 郁子 : アジア経済研究所 地域研究センター 主任研究員

しみず たつや  
清水 達也 : アジア経済研究所 地域研究センター 研究グループ長代理

こだま ゆか  
児玉 由佳 : アジア経済研究所 地域研究センター 主任研究員

## はじめに

「ひとつの妖怪が世界中の途上国をさまよっている。協同組合主義という妖怪が」

これはマルクス・エンゲルス『共産党宣言』冒頭部分の言い換えだが、実際、途上国では共産主義や社会主義に劣らず、欧州で生み出された協同組合主義が非常に早い段階から持ち込まれ、実践に移された。そしてその多くは失敗するか、あるいは理想像とはほど遠い姿でしか定着しなかった。にもかかわらず協同組合の思想と実践はいまだに根強い支持者をもっている。単に一部の思想家や団体の運動にとどまらず、政府の政策プログラムに組み込まれることも多い。本研究の問題意識は、欧州で生まれた協同組合思想が、なぜこれほどまでに途上国を魅了したのか、どのように受け止められたのか、なぜうまくいかなかったのか、にもかかわらずなぜまだ支持されているのか、といったことにある。

こうした問題意識は、我々が途上国農村を調査するときの「体感」とも符合している。調査の過程でしばしば「協同組合」に遭遇し、その指導者から高邁な理念を拝聴することになるのだが、現実には「民衆の組織」というものからはほど遠いように見える。しかし協同組合は農村に厳然と存在している。農村研究者としては「協同組合」を無視することはできない。どのように理解すればよいのか、考えねばならない。

本研究会はこうした問題意識から、協同組合に対してどのような研究課題を設定し、どのようなアプローチをとればよいのかを考えるための予備的考察をおこなったものである。具体的には、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ途上国の協同組合についての先行研究を検討し、協同組合の実態や研究の状況を知ることを課題とした。研究状況を鳥瞰するのが主目的のため、個々の国に関する研究成果にまで踏み込んだ検討をおこなう余裕はなく、関連文献を網羅できたわけではない。あくまで今後の研究につなげるための、初発の作業として、各章を読んでいただきたい。各章の執筆者以外に、研究会には当研究所研究員の山田七絵、荒神衣美、長田紀之、柳学洙がオブザーバーとして参加し、各々の知見を提供してくれた。

なお、我々の問題関心が、農村および農業部門の開発にあることから、本研究会の各章が扱う協同組合は、もっぱら農村あるいは農業に関わる協同組合である。

2014年3月

研究会主査・本報告書編者

重富真一